

職印

2023. 8. 15

今の仕事の場合、毎日のルーティンとして押印がある。押す印鑑は2種類である。校長としての私印と職印である。割合としては、3：2で私印の方が多い。

本校の教頭先生は、私に気を使ってか、押印するものがたまらないようにと、一日に数回に分けて、校長室に持ってきてくれる。その方が、起案者である先生方の手元に早く戻ることになる。また、私の方も、1回あたりの量が少ない方が判断力が働く。教頭先生に感謝である。

7月のある日だった。ときは夕刻だった。教頭先生が、たった一つだけ起案文書を持ってきた。私印を押せばよいものだった。中身を確認した。問題はなかった。ところが、何を勘違いしたのか、いつものように二段目の引き出しから印鑑ボックスを取り出し、職印を手にした。あろうことか、私印用の小さな枠に、大きな職印を押してしまった。自分で笑ってしまった。「なんで言ってくれないの」と笑いながら教頭先生をせめていた。

さすがに、こんなことは初めてだった。教頭先生は、「お疲れなんでしょう」と気遣ってくれた。だが、違う。ボケているだけである。自覚症状もある。起案者には「特別に職印を押しておいたから」と、わけのわからない言い訳をしておいた。

「これはマズイ」そう思った。珍しく病院に行き、数日前から薬を服用していた。家に帰り、夕食後の薬を手にした。飲もうとして踏みとどまった。2錠でいいのに、4錠も手にしていた。「やはりマズイ」何かがおかしい。この日は、出張の際に、車のナンバーを書いたが、前の車のナンバーを書いてしまった。同じ日に、何度もボケていた。少しばかり焦る。

そこで、考えた。単純な数字が覚えられない。人の名前が出てこない。メモをしながら漢字が出てこない。単なる年か。それなりに頭は使っているはずである。人の話を聞いたり、文書を読んだりして、判断をしている。この「校長室だより～燦燦～」の原稿だって毎日打っているではないか。だが、何かが違う。きっと、パソコンを打つだけではだめなのである。やはり、手で書かなければ脳みそが働かないような気がする。

さらに、考えた。解決策の一つが浮かんだ。国語の授業をすることである。考えながら人に話す。黒板に文字を書く。漢字が書けるは心配ではある。授業を行っていたときと比べると、人前で話したり、手で文字を書いたりする機会も量も減った。これが、よくないのでないか。

だからと言って、2学期から授業をやるわけにもいかない。授業に代わるようなものはないか。いや、来年の4月から授業をやればいいのである。そういう結論に至った。2学期からは、衰えていく自分と本気で闘うことにした。まずは、職印を正しく、丁寧に、気持ちを込めて押すことから始めようと思う。職印には責任がある。間違えている場合ではない。